

未来への の 伝承

第180回

土浦の花火と神龍寺

土浦の花火競技大会は今から97年前の大正14(1925)年9月、第1回全国煙火共進会として始まりました。この大会の発案者は曹洞宗の僧侶・秋元梅峯(1882~1934)で、任職をつとめていた神龍寺(文京町)には現在も花火の歴史を語る文物が大切に保存されています。今回は、土浦の花火の発祥の地ともいえる神龍寺を紹介しますので、ぜひ訪れてみてください。

本堂の右手には穏やかな眼差しをたたえた梅峯の胸像があります。梅峯は競技大会を始めるにあたり、2つの願いを込めました。1つは慰霊です。霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者や梅峯が率いた大日本仏教護国団の死亡者、関東大震災の犠牲者らへの鎮魂の想いが込められました。もう1つは、東京方面からの観客を誘致し、花火で土浦町の経済を活発にしたという願いです。

梅峯は、笠間稻荷神社全国煙火競技会を参考にし、競技会で重要な役割を担っていた下館町(現筑西市)の火薬販売業・竹山伝次郎を大日本仏教護国団の顧問に迎え入れました。また、本堂を全国から集まった花火師の宿舎に提供し、大会後の表彰式では本堂を背景に記念写真を撮りました。神龍寺は競技大会の拠点となったのです。

大会の財源を確保するため、梅峯は檀家から寄付を募り、借金もしたと伝えられています。大正15(1926)年、第2回大会の「煙火打上番組」(プログラム)には待合や料亭、そば屋、仕出し・弁当、運輸会社、銀行、薬局、旅館、百貨店などが名を連ね、広告料を支払って協力していました。

のちに大会の主催は大日本仏教護国団から土浦煙火協会に変わり、梅峯は煙火協会の初代会長に就任して花火大会を支えました。大会前には土浦駅構内にポスターや花火師の人数が飾られ、当日には臨時列車が運行されました。商店では開催日に合わせ、大売り出しが行われました。

実は、現在ある梅峯の胸像は昭和29(1954)年に再建された2代目です。梅峯は昭和9(1934)年に亡くなり、三回忌に建立された初代の立像は太平洋戦争中の金属類回収



秋元梅峯立像(初代)

令により供出されてしまいました。

花火で慰霊を願った梅峯の想いは、境内にある海軍航空隊殉職者供養塔に込められています。昭和10(1935)年に建てられ、手前の石碑に航空機事故で殉職した41人の名が刻まれています。

また、境内には、梅峯に請われて土浦に移り住み、昭和11年に北島煙火店(のちの土浦火工株式会社)を設立した北島義一(1908~1979)の墓もあります。義一は黒子村(筑西市)に生まれ、煙火店を営んでいた父・文三郎(1887~1952)とともに土浦に移り、戦後は全国に先駆けて競技大会を復活させました。土浦火工は数々の競技大会で優秀な成績を収め、その技術を学びにきた花火師の子弟を育てました。昭和38(1963)年、土浦の競技大会で通商産業大臣賞が授与されることになったのも義一の功績です。義一は日本煙火協会の前身である日本煙火工業会の会長を長く務め、花火製造業の地位向上や打ち上げの保安に力を注ぎました。今も、土浦を訪れた花火師が墓に花を手向けていきます。

土浦の花火について紹介した図録「花火と土浦―祈る心・競う技」は、博物館付属展示館「土浦城東櫓(亀城公園内)で販売しています。岡市立博物館(☎824・2928)



海軍航空隊殉職者
供養塔